幼児生活団幼稚園

共に支え合いながらの保育

園長　栗原美枝子

現代の乳幼児を育てている家庭は孤独である場合が多い。両親が育児について誰に相談することも出来ず、必死になって育てている。入園してくる子どもの保護者は、喜びというよりも不安を抱えて新しい環境（幼稚園）に飛び込んでくる。迎える私達は子ども達をしっかりと受け止めると同時に、その保護者も支えながら一緒に子ども達の成長に関わる大人として一歩ずつ歩んでいく努力をしてきた。

Ⅰ.保護者支援

4才組は入園後、午前保育で幼稚園生活を慣らしていく。昔は祖父母の家や近所の方に預けて親が出かけることがあったが、今はほとんどそのようなことがなく、親子が数時間離れて過ごすことが初めての家庭が多くなっている。したがってどのように子どもと離れていけばよいのかが分からない保護者の支援が必要となっている。

生活団では入園間もない4月に、新入園児保護者と担任が面談を行っている。この面談は保護者が何に対して不安感を抱いているのか、何に対して悩んでいるのか等を聞き、幼稚園が一緒に子どもを支えていくことを伝え、保護者と幼稚園（担任）との信頼関係を築いていく一歩としている。

共働き家庭が多くなっていることもあり、保護者同士の関わりが少なく、自分の子ども以外の子どもの姿を見る機会も非常に少ない。そのために一人ひとりの子どもの姿が違って当たり前ということが理解されず、我が子が周りの子どもと違うことに、悩み苦しむ保護者が多い。

生活団では子ども達の姿を見ていただくために、美術活動や遠足付き添い、お食事調理等の保育補助に入っていただいている。参加していくうちに保護者自身、ネットワークが広がり子育てに対する考えも様々な話を聞くうちに、凝り固まっていた考えがほどけて不安感が軽減していく様子が見られている。

核家族が増える中、保護者同士のおしゃべりが出来る時間が必要になってきている。3学期から「PLAYDAY」と称して毎週木曜日、11時30分～14時、ホールと園庭を開放した。遊んでいる子どもを見ながらする保護者同士のおしゃべりは、ほっとする時間でもあり、その中で異年齢の保護者と関わり、様々な情報を得て保護者同士が仲良くなる時間となっているようだ。引き続き2026年度も行い、開催日を増やしていきたいと思っている。

Ⅱ.お食事調理

昼食の調理については、昨年から保護者委員に代わり、幼稚園側が保護者に希望日を聞き、調理希望票を作成している。本来は大勢の保護者に入ってもらい生活団のお食事を作っていきたいと考えているが、未就園児を抱えている保護者は預ける先がない等の理由で、参加が叶わない。また体調不良で休むことになったら迷惑がかかる、というプレッシャーなども抱えていることも聞くので、調理員が必ずいて、休んでも大丈夫なことも伝えながら進めている。

父親が入る日もあり、子ども達にとっては誰のお父さん、お母さんということが分かり、保護者による献立発表や一緒に食べることによって様々な方の力で自分達が食べるお食事が作られていることが分かるようになっている。お食事の時間は賑やかで楽しい雰囲気である。

生活団の子ども達は、始めは好き嫌いがあり「今日のお食事は嫌だな」と登園を渋ることもあるが、みんなで食べる時間が楽しくて、苦手な物を一口食べられたらみんなに褒められたり、という経験を積みながら、卒園の頃には殆どの子ども達が完食して、おかわりもするようになっている。

Ⅲ.一人ひとりの思いを受け止める

母親が自分の持っている知識や感情を先にたてて、知らずしらず赤ん坊のみずから生きる力を無視していると、自分のなかに強く存在しているところのみずから生きる力を弱めていく、と羽仁もと子著作集に書かれている。注1

私達職員は、集団生活である幼稚園でのルールや善悪は丁寧に伝えていくが、「教える」保育ではなく「共に考える」保育でなくてはいけないと考えている。

教職員の加配を必要とする園児が各学年にいるが、その子ども達が自然にクラスでの生活に入れるよう、全職員で見ていくように工夫をしてきた。

朝の集まりでみんなが椅子に座って先生の話を聞いているが、椅子に座れずに立ったまま隅の方で工作をしながら先生の話を聞いている。手を動かして何かを作っていないと落ち着かない子どもである。椅子にじっと動かずに座っていることがこの子どもにとっては、非常に苦痛な時間である。

遠足に出かけた後、紙粘土で動物を作る美術時間に、クリスマスに飾るリースのようなものを作っている子がいる。その子どもにとっては、「一番印象に残っている動物、または好きな動物」ということが、今自分が興味を持っているクリスマスに関係するものであったようだ。

一見するとみんなと同じ行動をせずに、はみ出た子どもと写ってしまうかもしれないが、生活団では、その子一人ひとりの思いを受け止めて、今何を感じて、考えてその行動をしているのかを大事に、関わってきた。

周りの子ども達もそのような関わりを見てきているので、誰一人「〇〇君、変なことをしている」「〇〇君いけない子だ」とは言わない。反対に一緒に手伝ってくれたり、時には声を掛けずにそっと見ていてくれたり、何も言わずに優しく手をつないで誘導する姿も見られた。

Ⅳ.実体験を大事に

図鑑や絵本で得る知識量は多いが、実際に五感で体験したことは体が覚えていて、忘れることのないものである。生活団では、このような体験ができる場所が多くある。

学園の梅を樹木グループの学生、先生方と一緒に収穫し、生活団に帰って下処理を行い、食グループの学生、先生方と一緒に梅シロップを作った。

竹林に入って実際に生えているたけのこを観察。その後、お食事でたけのこご飯が出てきて食す。

新天地の畑でさつま芋や人参、じゃがいもを植えて自分の手で収穫。

中等部にいるヤギや豚を見に行き、大きさや匂い、鳴き声、動き等を五感でそれぞれが感じとる。

学園キャンパスの四季折々の植物、虫をお散歩へ出かける度に、子ども達は発見して遊びの材料にしている。

このような学園だからこそ体験できることを私達職員は保育カリキュラムの中に取り入れて行ってきた。

Ⅴ.プレ幼稚園との連携

園庭開放や未就園児行事に0歳児、1歳児のご家庭が多く参加するようになっている。幼稚園選びは低年齢化しており、 プレに通うご家庭は、生活団幼稚園の保育内容や先生達の雰囲気を知りたい方である。資料などを見て生活団に興味を持ち、自分のお子さんにあっていると考えて参加し、実際に保護者が体験して納得出来たら入園へと繋がっている。プレ幼稚園のカリキュラムに満足するのではなく、どれだけ生活団幼稚園とのつながりがあり、生活団保育を経験できるかを期待している。

プレ幼稚園カリキュラムの中に生活団園庭での遊びや生活団食事の試食、学園キャンパスでの遊び等を取り入れて、生活団の理念、大切にしていること、職員の雰囲気を感じてもらえるようにしてきた。

プレ担当者は普段から生活団保育にフリーで入っているので、ご家庭からの質問や生活団保育に関しての質問等を丁寧にお伝えすることが出来ていた。

Ⅵ.今後の生活団

保育園や子ども園への入園が殆どになっている社会であるが、子どもと向き合いたい、子どもにとって良い環境で育てたい、というご家庭を迎え共に子どもに関わっていく保育を目指して行く。

参考文献

注１　羽仁もと子「おさなごを発見せよ」『羽仁もと子著作集第 18 巻』76 頁。